

2026.03.01.

## 「神の栄光を求める者」

旧約 創世記 17章9～14節

新約 ヨハネによる福音書 7章14～24節

### 1. はじめに

ヨハネによる福音書を共々に読み進めています。今朝与えられている御言葉は7章14節以下ですが、この7章からイエス様が様々な業をなされ、お語りになった場所はエルサレムとその近郊となります。ここから20章の復活されたイエス様と弟子たちとの出会いの場面まで、ずっとエルサレムとその近郊です。いよいよイエス様の十字架が近くなってきます。それは7章1節の「ユダヤ人が（イエス様を）殺そうとねらっていた」という言葉からもはっきり分かります。私共は今、レント（受難節）の日々を歩んでいます。イエス様が私共のために、私共に代わって十字架の苦しみをお受けになられたことを心に刻みつつ歩む日々です。イエス様の十字架への歩みを、今朝与えられた御言葉からしっかり心に刻んでまいりたいと思います。

ところで、どうしてイエス様はユダヤ人達に「殺そうとねらわれる」ことになってしまったのでしょうか？その発端は5章に記されている「ベトザタの池での癒やし」にあります。イエス様はこのベトザタの池で、癒やされることを38年間も待っていた男の人を「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」(5:8) とのみ言葉だけで癒やされました。問題は、その日が安息日だったということでした。ユダヤ人のある人達は、これを律法を破る「民衆を惑わす」(5:7) 行為だと受け止めました。これだけ堂々とユダヤ人社会の規範である安息日規定を破る者をそのままにしておく訳にはいかない。そう考えたわけです。しかし、もう一方には、イエス様の為された業はとても人間の業とは思えない。「この方こそ、救い主メシアだ」と考える人もいました。イエス様に対しての評価が二分している。そういう状況の中で、イエス様はお語りになり、また人々との対話も行われました。それが今朝与えられている所です。

ここで告げられていることは、第一に「イエス様は誰か」ということ、第二に「神様の御心はどこにあるのか」、第三に第二のことと重なるのですが「律法を守るとはどういうことなのか」、そのことが論じられています。

### 2. 聖書を良く知る

さて、イエス様はエルサレム神殿の境内で教えを語り始められました。この時、エルサレム神殿

には仮庵の祭りのために、たくさんの人が集っていました。このイエス様の教えを聞いて「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」(7:15) と言う人達が出てきます。イエス様はきっと「聖書の〇〇には、こう記されているが、それはこういう意味である。神様の御心はこれである。」といった具合に教えられたのではないかと思います。

この時の聖書というのは当然、現在、私共が使っております聖書の旧約の部分です。新約聖書はまだありません。私共はこのように誰でも聖書を持っています。しかし、聖書が誰の手元にもあるようになったのは、そうは言っても大変高価なものではありませんでしたが、16世紀のグーテンベルクの活版印刷が発明されてからです。宗教改革はこの活版印刷によって聖書が人々に普及したということを見逃して語ることは出来ません。では、それまではどうであったかと言いますと、聖書は修道院や教会に鎖に繋がれてあるだけでした。まして、イエス様の時代、聖書は旧約の39の書が一巻ずつ巻物になっていて、それがシナゴグと呼ばれる地域の会堂にありました。そして、聖書を学ぶというのは、まずは全てを暗記することから始まりまして、そのあと「タルムード」と呼ばれる口伝律法を学び、更にそれらの解釈の積み重ねである「ミドラシュ」を学びます。これは実に膨大な量があります。それらをマスターし、更に現実の諸問題に適用することが出来るようになった人が律法学者と呼ばれる人達です。まず聖書を全て覚えるというところで、「私には無理」と思ってしまうかもしれませんが、それは出発点でその後で何倍・何十倍とある学びがあるわけです。こういう学びを何十年と積み重ねて律法学者となった人達は、人々に何かを尋ねられたならば「このことについては、これこれの律法に記されており、その解釈は偉大な律法学者〇〇によればこのようになる。」という言い方、考え方、発想になるわけです。そして、それが当時のユダヤ社会を支配していました。では、これとイエス様の教えとの違いはどこにあるかと言いますと、「この聖書の意味は偉大な律法学者〇〇によればこのようになる」とは、イエス様は言われなかったということです。イエス様はストレートに、「この聖書の言葉の意味はこうである。これが神様の御心である。」と告げられた。人々は、その言葉に驚きました。「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」(7:15) と思った。イエス様は高名な律法学者のもとで学んだこともないし、指導を受けたわけでもない。それなのに、聖書に示された神様の御心に対して、誰よりも深く、明確にお語りになりました。その言葉に人々は驚いたわけです。

### 3. イエス様の教えは神から

ここで、当然、「どうして、イエス様はこのように聖書を良く知っていたのか？」という問いが出てきます。イエス様はこれに対して「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。」(16節)とお答えになりました。要するに、私は神様から直接、聖書

の言葉の意味を教えていただき、神様の御心を教えていただいた。だから、特に聖書の勉強をする為に誰かの弟子になる必要もなかった、そう言われた訳です。逆に言いますと、人々が正しいと考えていた律法学者達の教えというものは、信仰の先達から受け継いだものではあるけれど、所詮人間の考えたものだ。しかし、私の教えは違う。私の教えは神様から直接教えていただいたものだと言われたわけです。これは、直接的ではありませんけれど、イエス様はご自分を「神の御子」とあると告げているわけです。

では、イエス様の教えと律法学者を代表とするユダヤ社会の常識となっていた教えと、どちらが正しいのか、つまりどちらが神様の御心を示しているのか？またそれをどのように判断することが出来るのか？という問いが生まれます。これは、中々難問です。しかし、イエス様の答えは実に単純です。あうだこうだ言いません。イエス様は単純にこう答えます。「**この方（神様ののこと）の御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。**」（17 節）答えは単純です。神様のみ心を行おうとしているならば、その人にはどっちが正しいか単純に分かる、と言うのです。これは、律法学者達は「御心を行おうとしていない者たちだ」と言っているのと同じです。実に過激な言葉です。どうしてイエス様はここまで言い切れたのか、また言わなければならなかったのか。その理由をはっきりしています。律法学者達によって、神様の御心がねじ曲げられている。神様の御心が誤解されている。つまり、人々が神様の御心に従った歩みから遠ざけられている。イエス様は、それを正さなければならない、そうでないと人々は神様の御心が分からない、愛が分からない、福音が分からない、人々が神様の救いへと導かれることがない、そう考えたからです。

#### 4. 愛の業は律法を全うする

律法学者に代表される当時のユダヤ教の指導者達によって、神様の御心がねじ曲げられているということがはっきり現れたのが、5 章 1 節以下にあります。ベトザタの池におけるイエス様の癒やしの御業に対してのユダヤ人達の対応でした。38 年も病に倒れていた男の人を、安息日にイエス様は癒やされました。ユダヤ人達は、イエス様が為されたこの癒やしの業を、神様の御業、イエス様の神の御子としての「しるし」として受け取ることが出来ませんでした。神様を誉め讃えることもせず、神様によって一人の男の人が癒やされ、新しく神様の恵みの中に生きる者となったことを喜びもしませんでした。それどころか、安息日には「何らもしてはいけない」という十戒の第四の戒めを堂々と破っている。とんでもない奴だ。人々を惑わし、神様の戒めから人々を遠ざける危険な奴だとイエス様を見なした訳です。彼らは、とにかく十戒に代表される律法を守る。ただそのことによってしか神様の救いには与れない。律法を破る者は神様に敵対する者、神様によって裁かれ、

滅びる者。そう理解していました。ですから、38年もの間、病に苦しんでいた者が癒やされても、その日が安息日であったが故に、癒やされた人と共に喜ぶことが出来ず、「これは律法違反ではないか」といって、癒やされた人を、そしてイエス様を糾弾するという態度をとってしまったわけです。神様の御心を示している律法というものは、そもそも私共が神様の御心に従うためにあるのだから、イエス様は神様の愛を全うすることこそが律法を全うすることなのだと理解されていました。そのことを示すためにイエス様は来られました。しかし、ユダヤ人達の理解はそうではありませんでした。

イエス様は律法についてマルコによる福音書 12:28 ~ 31 節でこう告げられています。「一人の律法学者が進み出、……尋ねた。『あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。』 12:29 イエスはお答えになった。『第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。 12:30 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』 12:31 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。』十戒に代表される律法は、実におびただしくあります。聖書の中だけではなくて、口伝律法と呼ばれる聖書には記されていないけれども、先祖代々伝えられてきた律法もあり、それは膨大な数であり、その全てを守ることが「正しいこと」でした。イエス様はその膨大な律法を「第一に神様を愛すること、第二に隣人を愛すること」それに集約される。それが「神様の御心」だと告げたわけです。第一に神様を愛すること、第二に隣人を愛すること、この二つはイエス様においては対立しませんし、矛盾もしません。神様を愛することは隣り人を愛することであり、隣り人を愛することは神様を愛することだからです。しかし、ユダヤ人はそうは考えなかった。律法を決められた解釈通りに行うこと、それこそが正しいことであり、その中でも安息日規定はとても重要なこととされていました。ですから、イエス様が安息日に癒やしを行ったことは、律法違反であり、神様の御業であるはずがないと考えたわけです。

## 5. 割礼と病人の癒やし

そこでイエス様は、安息日に何もしてはならないと言っても、あなたたちは割礼を施すことは行っているではないか。それなのに、38年も病に苦しんでいる者を癒やすことが安息日規定違反だというのは、どういうわけなのか？と反論します。この割礼というのは、先ほどお読みしました創世記 17 章において、アブラハムに神様が「契約のしるし」として与えたものでした。割礼は神の民のしるしとして、大変重んじられました。神様はアブラハムにこうお命じになりました。「いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、直系の子孫はもちろんのこと、家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷でああなたの子孫でない者も皆、生まれてから八日目に割礼を受けなければ

ならない。」(創世記 17:12) ですから、生まれて 8 日目が安息日に当たっても、これを行うことが律法を守ることであり、神様の御心に適っていると解釈して、これを行っていたわけです。それなのに、安息日にイエス様が癒やすと安息日規定違反だという。それが本当に御心に適っていることなのか? そうではないだろう。そうイエス様は告げているわけです。23 節「**7:23 モーセの律法を破らないようにと、人は安息日であっても割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身をいやしたからといって腹を立てるのか。**」と告げられている通りです。割礼を施すのは良いが、人を癒やすのはダメだ。それが本当に安息日を与えられた神様の御心に適っていることなのか。そうイエス様は問われたわけです。

この議論の根本にあるのは、律法を文字通り守ることによって神様の御前に義となる、正しい者となるというユダヤ人達の理解と、この律法の根本にある神様の愛、神様の憐れみの心を自分の心として生きることが神様の御心に適うのだという理解との対立があります。イエス様は律法なんてどうでも良いと言われているのではありません。そうではなくて、律法を守るというのは、その律法を与えられた神様の御心、神様の愛に生きるということでしょう。それは「第一に神様を愛すること、第二に隣人を愛すること。」という最も大切な律法の中心を、二つの別々のこととして切り分けずに、一つのこととして受け取ることことです。この二つを分けてしまっ、文字通りに律法を守ることだけに心を向けるならば、それは「**うわべだけで裁く**」だけで、決して「**ただしい裁き**」にはならない、御心に適うことにはならないとイエス様は言われたわけです。

## 6. 自分の栄光ではなく、神の栄光

イエス様が 18 節で「**自分の栄光を求め者**」と「**自分をお遣わしになった方 (つまり神様) の栄光を求め者**」という言葉で告げられたのは、まさにこのことでした。文字通りに律法を守ることによって神様の御前に正しい者となろうとするのは、結局、自分の栄光を求めているに過ぎない。自分が正しい者であることだけを求めているからです。しかし、神様の愛に生きようとする者、神様の愛の業に仕えようとする者が神様の栄光を求め者だ。神様が、そしてイエス様が私共に求めていおられるのは「神様の栄光を求め者」として生きることであることは明らかです。

ここには「自分は正しい者だ」と思いたい人間の罪が示されています。自分の罪や愚かさを認めることが出来ず、どこまでも「自分は正しい」と思い、自分と立場や考えが違う人を排撃してしまう人間の心。これは誰の中にも間違いなくあります。ですから、「だからユダヤ人はダメだ」などと暢気なことは言っていられません。これは私の問題だからです。牧師とて例外ではありません。いや、牧師こそ、「自分は正しい」という思いに囚われやすい者です。確かに、私共は「自分は正しいのだ」と思いたいものだけれど、そこに立った途端に私共は「自分の栄光を求め者」になって

しまう。そこでは何が起きるでしょうか？互いに「うわべで裁き合う」ということが起きてしまう。「あなたはここが間違っている。それじゃダメだ」と、互いに裁き合うということになってしまう。

昨日、アメリカとイスラエルがイランに対しての攻撃を始めました。イランも反撃しています。心が痛みます。この戦争が長引くのか、数日、数週間で終わるのか、長期化するのか分かりません。主の平和を祈らないではおられません。ここに「私が正しい」と言い張るところで起きる、人間の罪の現実が如実に表れています。国家という単位での裁き合いは戦争となります。しかし、キリストの教会もまたキリスト者も、その歩みにおいてこのような過ちをずっと犯し続けてきました。それでは「神の民」として、神様の栄光を現すことが出来ません。まことに、神様に申し訳なく思います。

イエス様が私共に「神様の栄光を求める者」であることを求められているということは、自分の正しさ以上に、神様の愛に生きよう、神様の愛の業に仕えようとすることに思いを向けていくということなのでしょう。別の言い方をすれば、「良い人・正しい人になろうとするよりも、目の前の人に対して神様が私に求められている愛することに忠実である」ということであり、「正しさと愛は分けない」ということなのでしょう。イエス様はヨハネによる福音書 13:34 で「**13:34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。**」と告げられました。まさに、このイエス様が与えられた「新しい掟」、「互いに愛し合う」ということを何より大切にしていこうということです。そこに生きる切る時、私共は律法を全うする者とされていきます。私共が神様に救われた、新しい神の子・神の僕として生きるということは、この「互いに愛し合う」という所に生き切るということです。それは、「互いに仕え合う」と言い換えても同じです。愛し方、仕え方は人により、状況によって違うでしょう。しかし、互いに愛し合い、互いに仕え合うところに、神様の栄光は現れ、神様の御心は全うされていきます。たとえたどたどしい歩みであったとしても、私共はこのりイエス様によって示された道を、感謝と喜びをもって歩んでまいりたいと心から願うのです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、私共が自らの正しさを振りかざして、自らの栄光を求める者であることを教えてくださいました。そして、御言葉を通して「あなた様の栄光を求める者」として歩むようにと勧めてくださいました。どうか、私共がその御心に従って「互いに愛し、互いに仕える者」として歩んでいくことが出来ますよう、聖霊なる神様の導きを心から祈り願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン